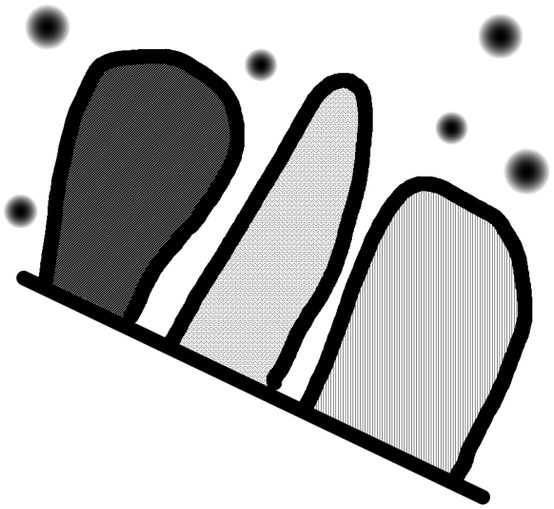
月　刊

Mélange

Vol.148



2019.11.24

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.148 2019.11.24
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」148号　目次

詩・俳句・川柳

秋の軽重を問うな〈川柳〉 ……情野千里　04

同郷　詠　和輪　〈俳句〉……岩脇リーベル豊美　05

空／吐息……にしもとめぐみ　06

ビニール製の恋人／傷の行方 ……中嶋康雄　08

りりかる ……大橋愛由等　09

メガフォン ……月村香　10

砦 ……高木敏克　11

ビニールの栓 ……田村周平　12

地面から濡れて／足があたたかいものにさわったが ……木澤豊　13

昨日の雨……高谷和幸　14

エッセイ

「益田っ子通信〈34〉フェスティナ・レンテ」……元正章　3

「アメリカ南部に暮らして⑤運転免許」……モス堀淵敬子　7

しりとり連詩

牡蠣の筏しりとり詩（尾崎放哉へのオード）……高谷和幸、大橋愛由等、千田草介、大西隆志、原田哲郎、森崎昭生　15

連載

神戸詞（うた）あしび137「 晩秋の小豆島・備前へ 記憶の色合わせ楽しむ」……大橋愛由等　16

編集部だより★68／ 2019年11月12日付の朝日新聞（大阪本社版）に関西に新しくできた古本屋の特集ページが掲載されている。それらの書店の担い手は30代、40代の若手である。神戸では、9月に「三宮駅前書店」がオープンしている。同時に元町通にオープンした「神戸元町みなと古書店」とともに、神戸市内の古書店7店舗が共同運営しているという。新しい試みだ。「三宮駅前書店」の存在は詩友の大西隆志氏に教えてもらった（かつて彼も姫路で「書肆風羅堂」という上質な古書店を経営していた）。この古書店はわたしの職場の近くにある。通勤途中に古書店ができたのが嬉しくてよく通い、女性スタッフと会話を交わすようになった。詩、哲学、評論などの品揃えもよく、価格も手頃なために、行くたびに購入しているし、周辺の詩人たちにも声をかけている。今月も、同書店で詩友の高木敏克氏とばったりあって、近くの行きつけの居酒屋におもむき「ふたり反省会」をしたものだった。古書店で友人に会い、そのまま居酒屋で気炎を上げるというのは、都市生活者にとっての醍醐味のひとつだろう。かつて、阪急三宮駅北側に間口一間ほどの古書店があり夜遅くまで営業していた。どこで仕入れたのか新刊書も置いてあったので帰宅時に通ったものだ（その古書店の店主は高齢男性だったので店を閉じたものと思われる）。かつて三宮にも元町にも多くの古書店があったが数が著しく減少してしまったのを寂しく思っていたが、ひとことでいえば代替わりなのだろう、また新たに古書店が増えている。街に古書店があるのはその街の書籍（エクリチュール）文化が巡廻しているように思えて楽しいものだ。／今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は木澤豊氏。テーマは恒例の宮沢賢治語り。〈『シグナルとシグナレス』〉についてです。（大橋愛由等記）

◆益田っこ通信

元（はじめ）正章

▼34号／フェスティナ・レンテ　〈2019.10〉

『十字架のない教会　共生庵の歩み』（荒川純太郎・荒川奈津江共著　かんよう出版）を読んでいると、「フェスティナ・レンテ　ゆっくり急げ」というラテン語を目にしました。今や昔、市民活動に奔走していたとき、ある先輩から教えられた言葉でした。「そんなに急いで、どうなるものでもなし。もっと、ゆっくりとやれ」というアドバイスでした。また牧師になってからも、別な先輩から「元君は、せっかちだから」と指摘されました。もともと呑気なほうで、自分ではせかせかしたところはないと自認しているのですが、他の眼には、そのように映ってしまっていたのでしょう。今まで総じて「元さんらしく、やれば」と好意的に見ていただきましたが、人生も後半期に入って、「これで、いいのか。今までのようなやり方では駄目だ」と反省させられます。というのも、やはり、ここ益田は神戸・阪神間と同じようにはできませんし、してはいけないと自戒する日々です。ここには都会では味わうことのできないものが、まだまだ残っています。都会の論理では通じない、通じさせてはいけない〝なにか大切なもの〟が秘められています。

「何をしたか、ではない。ひとは何をしなかったか、だ」（長田弘）。懇親会の席で、ある地元の人が、「奥深いことを言おう。ここは、何もしなくても、いいところなんだ」と、自慢げに語られていました。その意味するところ、如何に?!　何事もポコアポコ（ぼちぼち）やっていくのが、〝わが益田流〟となるように生きていきたいものです。

（編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです）

◆秋の軽重を問うな〈川柳〉

情野千里

梨狩り女が尻餅をつく秋の暮れ
中島みゆきの歌に出て来ぬ梨の芯
金色になるまで月の背を流す
青みかん靴の中敷きまで染める
恋捨てて葡萄二房ほど軽い
人恋うは贅沢なこと老妓微酔
きつね面　頬染めていてまがまがし
スケジュールノート買えと死神のお告げ
男を還す棚田の月をにぎらせて
紙相撲　ススキが座布団を投げる

（この作品は2019.11.11「カフェ・エクリ」合評会で発表されたものを本誌に転載しています）

◆同郷　詠〈和輪〉

岩脇リーベル豊美

芭蕉とはバナナ葉のこと蓑虫庵
故祖父母の訛り芭蕉と同じ
柚の花の白き香のレクイエム
山高帽とE.T.A.ホフマンの猫
動物園のとなり獅子咆哮に寝る
芥子花の奥に揺蕩う闇吸う蜂
香港の法案撤回日本語女子
とみちんの没後我が俳号消えた
掌上のマロニエの実の運命
静謐や嘴太鴉の啼き声のみ
銀杏葉をさがし施薬院の中庭
秋夕焼け雲出川を裸足で渡る
万聖節蝋燭灯す父たちへ
声高にそらに届かぬ暴言句
桃園の痴話喧嘩島のひと

◆空

にしもとめぐみ

あおい　あおい　あおい空がひろがる
もう　会えなくなってしまったあなたも
あなたも　あなたも　あなたたちも
きっとそこにいる

私も　いつかそこへいく
何もないのに　密集している空間
どこまででも　行ける
ダンス　ダンス　魂のダンス

ゆうぐれ　空は曇りゆき
海も空もビルも　モノトーンに沈む
海上都市の遠く　遠く　生活がざわめく
人々が働いている

朝焼けは神の贈り物
一面の薔薇色に広がる雲
今を生きる　一日　世界へ向けて
君に恋をしよう

◆吐息

にしもとめぐみ

何も　聞こえてはこない
そっと耳を澄ましてみる
voix voix voix voix
言葉にはできないこと

何も　見えてもいない
空に浮かぶ　面影人の
口ごもるような素振りも
やはり　声にならないこと

存在の耐えられない……
裏返しの実在
手触りで確かめるぬくもり
確かにあるということ

感じられるだろうか
微かな息の音を
voix voix voix voix
生きているということ

注／voix voix voix voix　フランス語
声　声　声　声

夫とアメリカに渡った当時、私は運転免許を持っていませんでした。関西は鉄道が発達していて必要がなく、実家にも自転車が数台あるだけでした。

アメリカは車社会だというのはきいていましたが、それは車があれば便利だという感覚で、車がないとトイレットペーパーさえ買えないとは思っていなかったのです。歩いたり自転車で用事を済ませるという人は誰もいませんでした。

それで免許を取ろうとするのですが、教習所というのはポイントターンというのを練習しました。

夫はその間車の中で仮眠を取りながら、終わるのを待っていてくれました。

実技試験は舅のオートマ車を借りて、なんとか受かりました。

筆記試験は前の町で受かっています。

これは手引き書を読んでから受けるのですが、もちろん英語です。その中に shoulder という単語がよく出ていました。もちろん shoulder が〝肩〟という意味であるのは知っていましたが、何の肩なのかは全くわかりませんでした。車の肩？　車体の肩？　日本で車の運転をしている人はそれが路肩だとすぐわかるでしょうが、私は全く分からず、知ったあともロカタをロケンなんて読んでいたくらいです。

アメリカに来て2年半後、35歳でやっと免許が取れました。車は姑からアメ車をもらいました。姑はトヨタの新車を買い、舅は日産マキシマ、夫は韓国のヒュンダイ(現代)で、家族でアメ車を運転しているのは日本人の私だけでした。セルフサーブの gas station で緊張しながら給油したりして、やっと一人で買い物とかに出られるようになりました。高速を走れるようになるのはまだ数年先の話しです。

アメリカ南部に暮らして―⑤〈運転免許〉

モス堀渕敬子

ありません。アメリカ人は高校で運転を習います。でも、そこでは21歳以上は受けられないという規則がありました。姑がそうであったように配偶者に習うのですが、夫の車はマニュアル車だったのでうまく運転できず、結局実技試験は落ちてしまいました。

その1年後、少し人口の多い近くの町に引っ越しました。そこには夫婦で運転を教えている人がいたので、3日間奥さんから実技の集中講習を受けました。生徒は私のような外国人が多いようです。

最初は量販店の駐車場で習い、後は住宅街で主にスリー

◆ビニール製の恋人

中嶋康雄

火を怖がる透明なお腹の中を
さっき飲んだビールが流れている
ビニール製の赤ちゃんも透明だから
裸になってもお腹の赤ちゃんは見えない
触ってみると動いているから
これが赤ちゃんだよと言うので
頷いて乾杯をする
白ワインが光りながら下りてゆく
赤ちゃんのことは
だまされているかもしれない
ずっとお酒にだまされてきたのだから
お酒好きのビニールにだまされていても
かまわないし
ずっとだまされていたい
ビニール製だから腐らない
あなたが死んで腐ってしまったら
包んであげる

やさしい言葉がおおいかぶさり
窒息しそうになり
手足をばたつかせると
今度だけはそっと放してくれる
もう離れられない
離れるのは簡単だ
火をつけて
黒い煙と一緒に消えてしまう

◆傷の行方

中嶋康雄

においは甘やかで
少し腐っている感じだ
傷がよどみを垂れ流すから
生きている気が今日もしている
今日も新しい傷が
空白を埋めてくれる

すこしうれしい傷に
溺れてしまう
長い間
四角い建物が放置され蔓草が
まとわり放題まとわりついて
冬枯れしている
「この建物は昔はステーキ屋さんだったのよ」
インフルエンザの人がウイルスを吐きながら教えてくれる
悪いものが流れている
今日も安いものと便利なものが
あふれている
退屈で
傷がいつまでもうずき
ながされるものは
ほんとうの色もなく
つまらないお知らせだけが
しのびよる
明日はもっと
萎びているだろう
傷ついたまま

◆りりかる

大橋愛由等

川蟹が蝋燭を消すため岸にあがる晩秋のエノンセ
（〈ここはあなたが暖をとる場所でないとすれば〉背後を囲む山麓のまだらな紅葉に反照している夕刻の陽差しがもうすぐ迫る山の玄夜を語りはじめたのですこしでも早くここから逃れようと焦り始めたそのときわたしとあなたが構築できなかった色紙が自ら形をなんどかデフォルメさせ六角錐まで成形させそこから溢れ出た種子（しゅじ）がさてはさてはと転がっていき峠の途中まで自転していくさまをわたしとあなたはどのように詩句に取り入れたらいいのだろうと語りあうべきなのか。
〈長い髪を洗うまえにアモンティラードを呑んだことにすれば〉情況にからみつく季節のコトバが櫂の木の前でひとりごととなって何人かの道化（フール）を制約するさまが八日前の現実（リアル）だとすれば土に眠っていた角石が翠雨によってさらされ数世紀ぶりに陽の光にあたったときにまず訪れたのが櫂の木から吹き出した微風だということも七日前の事態であり月が退屈のあまりかくれんぼをしようとしているところを見つけた道化（フール）がいっしょに遊ぶ真似をして月の尾骨をぎゅっと摑んだままにして動かなかった六日前のありようもだれかが年代記に記述するのだろう。〈退去する前に旗に種子（しゅじ）を植えつけることは可能なのか〉わたしとあなたが知らないあるいは使い方がわからないいくつかの単語と言い回しが部屋の隅から矢文のように向かってくるのを気づかないふりをして過ごす曜日にはきまって海から渡来した橋のたもとで道化（フール）がさめざめと啼いているのを高台の部屋から見ることができるので冬の気配が濃くなる前に虚空を翔ぶことができる鳥たちが歌う唄をハミングしながら今日もそしておそらく明日も川沿いの道を歩きつづけることになるのだろうか。

◆メガフォン

月村　香

ゆっくりゆっくり回る映画のキャメラ台に監督がメガフォンをあげてる
灯りと言えば道路に続く車の四つのライトたち　なぜか流れてゆく赤い
　それらが気持ちよく彼を反鏡してゆく
きょうも終わったのだ　一日の仕事が
なぜか家々の窓には興味なくて
ひたすら歩いて帰る

雨が降ろうと彼を構えても
これ以上の至福がどこにあるのだ
家だ！

彼はようやく歩き着く
ただいまを言わなくても
彼女がどこにいるか知っている

彼女の部屋だ
きっと何かをしている
明かりがもれている

物も言わず　彼は　冷蔵庫を
両手であける
何もない

彼女が大して注意も払わない体で叫ぶ
「何もないわよ　何も作ってないもの」
彼が言う
「いいよ　ここにちくわが一袋ある」
「ちくわたって！一本十円が五本で五十円のあれ？そんなの残ってい
　たかしら？」
「いや厚揚げも少しある　一番安い夕食で　これでいいよ……」

その男は喰っている
その女はカーテンのそばにいる
観客がスルーしかねない危うさ

わたしが見る限り
ひとつの風景だ

たったひとつの風景だ

映画監督のM.Amerは
もう次の映画の画面割りを
手で繰って　メガフォンの色を変える

ただ女は思っていただろう
わたしが物書きとして生き
手が震えるようになってしまったという
そういう事実は無視して
ごはんを作らないことを責めるのは

ただ男は思っていただろう
帰り道に中秋の名月がうごうごしく
輝いていたことは
おまえの興味にないのか

◆砦

高木敏克

究極の守りには極限の恐怖が付きまとうと言うのは本当か
そうなの究極の拒絶はね究極の恍惚を抱え込むことなのよ
マサダの砦が自らローマ軍を呼び込んだと言うのは本当か
わたしのふとももが震えるのはあなたを呼び込むためなの
愛が深まれば深まるほど憎しみはなぜ遠くからやってくる
あらいやだそれは憎しみじゃなくて誰かの嫉妬じゃないの
死海の夜に歪んだ月が浮き上がると闇の死体も浮き上がる
そうなのよわたしのからだはふわふわふわふわ夜の雲の上
守れば守るほどに鉄壁の甲冑に槍が飛んでくるのはなぜか
ねえあなたドアを閉めればしめるほど抜けないのに開くわ
砦の中には沙漠の洪水を飲み込む巨大な水槽が隠れている
それって羊水じゃなくって？あなたが気持ち悪いとかいう
火炎瓶を握り締めバリケードの中の学生は自由を奪還せよ
あら大変だわローマ軍がそこまで迫って夜陰に紛れている

国有人民軍から人間の自由と大学の自由を香港に取り戻せ
もう寝ていられないわ愛は寝ることじゃなくて起きること
いつだって爺さんは長いロープをたどりながら帰ってくる
誰も帰らないしローマ軍が奴隷を使って坂道を作ってるわ
歳をとる程に苦役を強いる人生は何処に向かっているのか
破滅に向かっていると思う一度滅びたら人生はおしまいよ
破滅の意味がわからないままわがままに老いてゆくマサダ
守れば守るほどに攻められるのが自由なのよねまるで人生
ユダヤ最後の砦となったマサダで最後に玉砕したのは何人
最後に自決した者以外で刺し違えたのは九人なの十人なの
そのことが悩ましい考古学上の問題になってしまっている
刺し違えるには偶数人間でなければならないってことよね
最後一人残って自決するためには十一人でないとおかしい
でも死体が十人分しかないとしたら一人消えた人がいるね
十一人目の死体は確かに立ち上がり巨大水槽の闇に消えた
生き残った女二人と子供五人を連れ帰った白いユダヤ人ね
そうだね何処の大学でもバリケードの中で必ず一人消える
そうね生まれ変わる人が必ず一人いてわたしも知っている

◆ビールの栓

田村周平

桜がアメリカの探偵小説を読んでいたら
ゴーギャンというテレビ番組が出て来た
ちびっこギャングなら僕も見ていた
ビーウィッチもアイラブローシーもそのころだった
テレビは画面の前に
ブルーのプラスティックカバーがあり
その上に布がかけられていた
アルファルハーは覚えていたが
スパンキーが少年か犬の名前か思い出せない

なんでもないとるに足らないことが
ビールの栓をポンと抜くように
思いだすことがある
なんだかすこし得したような
心に水をやるような

夏が過ぎて
陽ざしが心地よい日がつづいている
ビールを飲みながら
二階のベランダで探偵小説を読むのは
かえがたい楽しみのひとつだ
下を通る人をながめ
頁をめくっているあいだに
ぼくは何か
思い出すのを待っている

（この作品は2019.11.11「カフェ・エクリ」合評会で発表されたものを本誌に転載しています）

◆地面から漏れて

木澤 豊

地下では　小さな晩餐が開かれているようだ
地面から　灯りが漏れている

だれか歩いてくる
向こうへ行ってしまう

おっ　それは　わたし自身でできている
あくまでも　人である

耳底に八十年　街のおとが積み重なって
目の底に　街の灯りがともり

それがときおり　海に漏れ出すのだ
夕とどろきが　にじみ出すんだ

ゆうとどろきかね
何の残響だって　残るだろ

こんなに　古い倉庫が残るんだからな
かすかな筆跡の　落書きが見えるだろ

いまごろ　碇を上げる音が　きこえらぁ
鎖が擦れるおとが　おれのなかで

追っかけていく交通機関が　汽車だったもんな
やっと　ここまで

倉庫の壁が剥がれて
覆いかかってくる

埃の匂いがする
あいつ　突堤から

ひかる　さざ波へ歩いて行く
影のような

二人だけの晩餐会だ
古い畳に　ほっぺたつけて　な

◆足があたたかいものにさわったが

木澤 豊

右足の先が暖かいものにさわった
左足だった
老いは　このように　やってくる

呼ばれている
かすれても　でも透明な声
草むらからだろうか　深いところからだ

たくさんの
乱暴な文字の心覚え
読み直しても　繰り返しても

コンクリートの塀　すれすれに走るバスに乗っている
古い工場が　ある　トンネルの跡が　ある
輻輳する電線で　火花が散って

畠田に行くはずだった
いつのまにか　どこ行きか
わからなくなった
足が冷たくなり
わたしも車窓の景色も
とりとめがなくなった

◆昨日の雨

高谷和幸

デカルコマニー（霧に包まれた塔に立っていたあなたと傍らに誰も座らない椅子が一つ、たたまれた昨日の時空をふたつに開いて）蝶が翅を開いた形をした光の瑕が磁気の循環を乱していた。水蒸気と列車のこすれる音だけがわたしたちに行き来していたあの時。燐青銅に翅の形の瑕が焼き付けられて、プラグに接続されたストーリーの水面に腰（削除されたショートカット）を浮かび上がらせているようだ。そこで繰り返される昨日は話す術策が尽きた「わたしのようなもの」。あの子どもの息（恩寵）が吹きかけられた昨日。三十四歳で亡くなったアーティストが弓弾いたのも沈鬱な「YESTERDAYS」だった。そのアルバムの名前が思い浮かばない。（世界から消えてしまったのだろうか）一匹のバタフライが羽ばたくと世界のどこかが変わってしまう。「昨日の雨」デカルコマニー。その朝、人のような励起したものが欲望を持たずに鏡の前に立っていた。そして同じ磁界をおびた人が改札口へと傘を差して歩いて行く朝。

牡蠣の筏しりとり詩（尾崎放哉へのオード）

おもしろきおわった座（和幸）

ざれ言の岬の果ての
風の果てぼくたちの
疲弊した石のかたことの
なにも言わない木（愛由等）

機嫌悪き天気予報に
揺れる稲の穂（草介）

方向感覚の狂う
海岸線をめぐり
お天気は下り坂にむかう（哲郎）

海へと辿る
海の上の乗用車に
梅の香が調べる
歌へ時勢の尾の草（隆志）

さすらうように
あてないひとをたずね
声なきこえ いらっしゃい（森崎昭生）

岩窟に陽が暮れて黄金のヒポナッチの尾
六人＋一人の旅は最後の言葉に漂着し
生へと折り返す中途の道で渋滞した
母さん見えますか萼の上のぼくのへその緒（和幸）

写真左から、原田哲郎、大西隆志、高谷和幸
千田草介、大橋愛由等

神戸詞（うた）あしび

137-2019.11.24 大橋愛由等

晩秋の小豆島・備前へ
記憶の色合わせ楽しむ

「カフェ・エクリ」（高谷和幸主宰）の詩人たちによる一泊旅行で小豆島と岡山県南部を訪れた。

今年はトリエンナーレである「瀬戸内国際美術祭」が開催される年なのだが、参加メンバーの日程調整の都合上、美術祭が終了してからの紀行となった。

姫路港からフェリーに乗って小豆島に向かう。海はすこし荒れているものの、外洋のように猛々しく白波が立っているわけではない。瀬戸内は奄美航路のような「抜港」はないだろう。「抜港」とは船舶が島の波止場近くまでやってきているのに着岸の際の危険性を考慮してその港を抜かして次の港（島）を目指すことを言う。

小豆島では「尾崎放哉記念館」を目指す。ここを訪れたのは二回目。いちど朽ち果てていた終焉の家を建て直している。漂白といっても簡単にできるものではない。放哉も縁故、知己を頼っての移動と居住だったはずだ。日本列島民にとって漂白＝旅するひとには格別の畏敬の念をいだく傾向が強い。ここで放哉に敬意を評して自由律俳句を作り合うことにした。

〈さよさよと海鳴り島の終（つい）の家〉

〈群魚なり青へ誘（いざな）う青の影〉

〈石切りの沈黙（もだ）のままの島の果て〉　愛由等

小豆島から対岸の岡山県虫明港に渡る。「ゲストハウス曙だるま」が宿。ここを仕切っているひとりにモダンダンサーがいて何年ぶりかで再開する。かつて神戸・元町の高架下でダンス・舞踏と詩の朗読のコラボレーションライブをした時、わたしは暗黒舞踏家の今貂子さんと組み、大西隆志氏と組んだのがこの人であった。

近くの宿泊施設の大浴場でひと風呂あびたあと、宿に戻る。心尽しの夕食をいただいたあと、「月刊めらんじゅ」から最新品を、高谷、大西、大橋が朗読。さらに大西氏の発案で「しりとり詩」を即吟した。これは「おざきほうさい」の7文字を頭韻と脚韻に使うというもの。つまり「お」を選んだ人は「お」から始まる即興詩を書いて最後の文字を「ざ」で終わるようにしてそれを脚韻とする。二番目の人は「ざ」を頭韻にして「き」を脚韻とする、といった形式。これは大西氏が思いついた形式らしく、どの文字を誰が担当するのかじゃんけんであらかじめ決めているので、待ち時間というのがなく、非常に合理的であるといえよう（p15を参照）。

二日目の朝もおいしい献立。野菜は無農薬。宿を出立。まずハンセン病治療施設の長島愛生園へ行く。ここの施設は規模が大きかったので、高校まであった。今年も訪れた香川県大島を含めていくつかの治療施設の若者たちがここで学んだという。高校を卒業した彼らはどこに行ったのだろう。また元の施設に戻ったのだろう。

二番目の訪問先は、竹下夢二の生家へ。1934年（昭和9）に亡くなった夢二だがいまでも多くの人にその絵は愛され、ここも観光バスがやってくる人気スポットである。そして次は牛窓在住の詩人・森崎昭生氏宅を訪れる。

閑谷学校の前にたつ筆者

画家でもありアトリエで雄弁な語りを聞かせてもらった。今年7月に上梓した詩集『ある物語り』（現在実験箱）をいただく。昼餉は牛窓の豪商宅の一部を改装した食事処で弁当を食べる。ここ牛窓はかつて朝鮮通信使も訪れたこともある瀬戸内航路の重要な拠点なのである。そして最後はわたしのたっての希望で「閑谷学校」を見学。かつて母方の祖父・岸本邦巳が入学しようとして果たせなかった学びの舎である。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.148
神戸

2019年11月24日　通巻148号★
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)